



横浜の一〇年

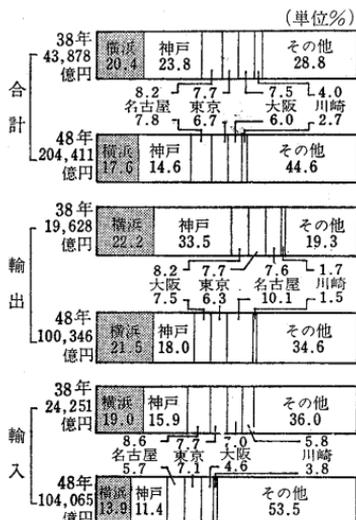
20 みなと

わが国第一の貿易港——横浜港

横浜港は、開港以来わが国の代表的国際貿易港として発展を続け、昭和四十八年には一〇万隻を超える船舶が出入りし、また取扱貨物量も三十八年の三・一倍に伸び、外国・内国貿易合わせて一億三、〇五七万トンに達した。このうち、外国貿易貨物は六、〇三九万トンで(図-110)、貿易額でも、四十八年に三兆六千億円を超え、全国の一七・六%を占めるわが国第一の貿易港となっており(図-111)、相手国は、広く世界各国に及んでいる(図-112)。さらに、海上輸送の革新にともないタンカー・コンテナ船・自動車船等の専用化が進み、本牧ふ頭を中心に取扱われるコンテナ貨物は、四十三年から四十八年にかけて、六・六倍に伸びている(図-113・114)。

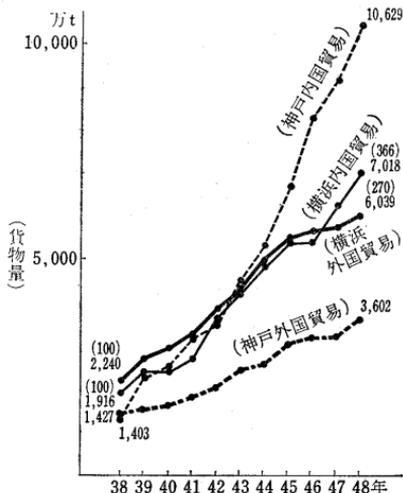
戦後横浜港は、物資流通のための基地としての性格が強まっているが、貿易情報、取引業務等の港湾管理機能を強化する一方、本市の貿易振興のために海外での見本市、取引情報の提供、アジア・共産圏との貿易の推進、産業貿易センターの建設等が進められている。

図-111 主要港貿易額の割合



〔資料〕 港湾局

図-110 貿易貨物量の推移—横浜港と神戸港

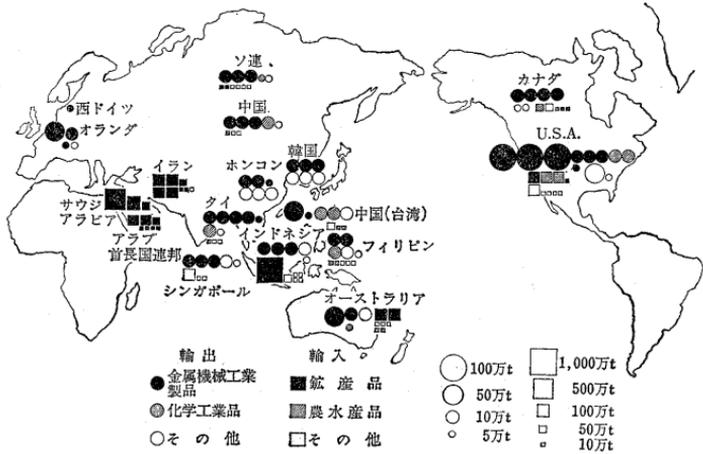


〔資料〕 港湾局



みなと

図-112 横浜港と主要国との貿易貨物量 (昭和48年)



〔資料〕 港湾局

図-114 外航入港船舶の専用船舶対比

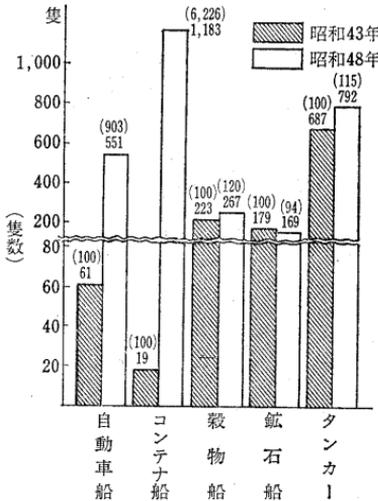
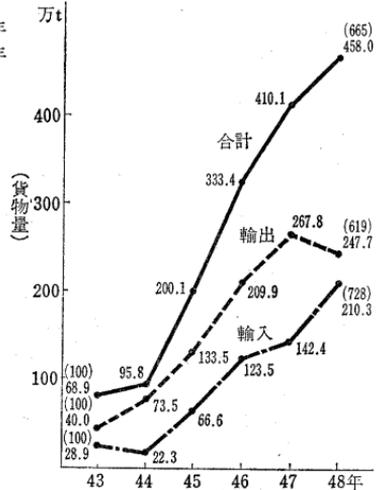


図-113 コンテナ貨物量の推移



〔注〕 () は昭和43年を100とした指数

〔資料〕 港湾局